

新発田 伊達美徳(都市計画家)

同時多発の中心街再生事業が進む 五年後に期待

新潟市の東20キロ、発田市は行政人口9万人の農業都市である。そのうち元城下町だった旧市街に5万人だが

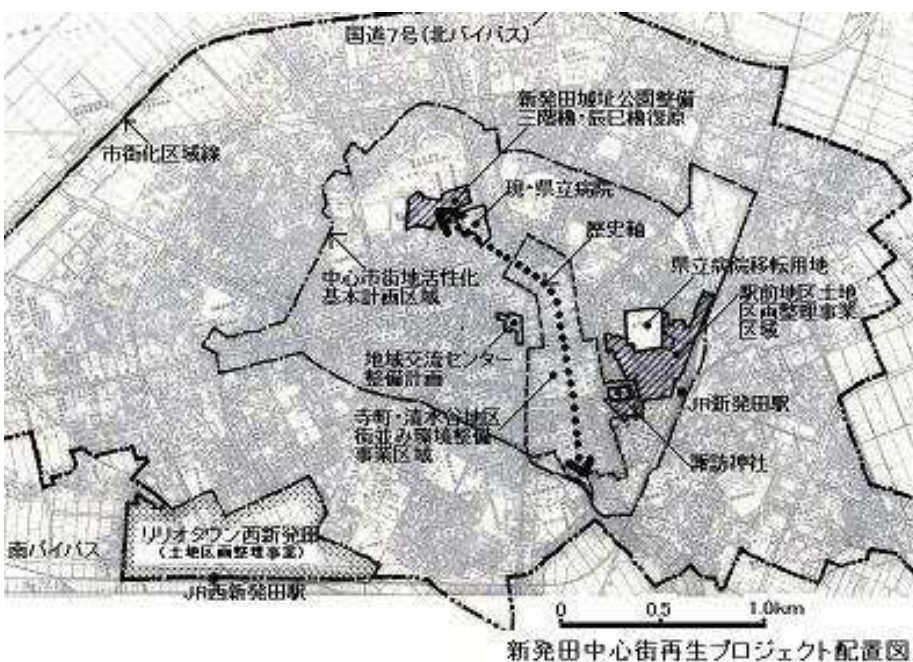


心臓部の中心市街地は18万人で、空洞化と高齢化が著しい。

今、その街なかでは、歴史的城下町復原型を福祉医療型という二つのタイプの中心街再生型まちづくりが進む。

その一方で、街の外側ではバイパス道路とニュータウン開発という、拡散型まちづくりも進行している。

はたして五年後はどうなってるだろうか、その地域活性化実験場ともいっべき状況を報告する。



祭礼空間の再生：諏訪神社殿復原

2001年11月5日未明、中心街住民は消防車のサイレンに夢を破られた。街なかの「お諏訪さま」の権現造りの華麗な社殿が、不審火で焼失したのである。

市民たちが「お諏訪さま」と親しく呼ぶ諏訪神社は、十八世紀中頃に新発田藩主が創建したと伝えられる由緒ある神社である。

その夏祭は江戸時代から新発田の街をあげての一大イベントである。若者たちの勇壮に曳き回す壮麗な台輪(山車)と、子供のかわいらしい金魚台輪が繰り出し、街は大きな興奮の渦になる。

街に延焼しなかつたのは不幸中の幸いだが、本殿、幣殿、拜殿の再建費用を見積もると四億円近くの巨額になった。この時期、大変なことだ。

だが、翌2002年2月、「諏訪神社再建実行委員会(高澤英介委員長)を結成して募金を開始したら、たちまち寄付が集って再建の目処がつき、5月には本格木造建築の再建に着工したのである。

このすばやい動きの基礎には、小さい頃から祭を通して市民の心に根づく「お諏訪さま」、祭りを支えてきた新発田の市民コミュニティがあるにちがいない。

当然ながら行政の支援はできないから、純粹に市民運動である。

図らずも起きた災禍を転じて、これは中心街再生プロジェクト

シエクトそのものとなっているのである。

2004年8月の再建復興祝賀の夏祭りは盛大なものにして市民は期待している。

インタビュー

仁木輝雄さんに聞く

諏訪神社再建実行委員会・氏子総代



伊達：このたびは大変なことでしたが、それにしても素晴らしい復興ですね。

仁木：社殿再建の工事は約三億五千万円かかるのですが、もうすでに二千名を超える寄付で8割を達成しています。やはりお祭りを通じて新発田市民のシンボルでもあるからでしょうね。燃える前の姿のように復原します。

伊達：そのお祭は、市民が支えているのですか。
仁木：「台輪」という三輪の山車を曳き回す勇壮なお祭で、今は六基が各町内にあります。お祭の最初の早朝に諏訪神社に台輪を奉納し、終りの日に各町内を曳き回して戻るのが「帰り台輪」で、このとき頭取の指揮の下で曳き回して勇壮にもみ合いますが、それにも一定のルールがあるのです。

お祭に備えて各町内会で台輪の曳き回し方の訓練を行うのですが、それが町内の若者から子供まで道徳と自然教育の場ともなっています。家ではなんの手伝いもしない子が、その訓練では率先して片付けや掃除などする(笑)。

交通が便利になって、お祭りには多くの観光客がくるし、この地方の出身者は家族連れで帰郷してきます。

伊達：このたびの災難が、新たな動きになるようですね。

仁木：来年は、本家の諏訪大社が六年に一度の御



炎上する新発田諏訪神社(新発田タイムス提供)



諏訪神社祭礼の帰り台輪(新発田市観光振興課提供)



辰巳櫓復元工事市民見学会(新発田城復元の会提供)



新発田城表門と復元工事中の辰巳櫓 2003.10

柱祭であり、こちらも竣工直後のお祭なので、諏訪大社から旧の御柱を拝受して「ようこ」の企画があります。御柱を市民が街の中を曳き回して諏訪神社に持って来て立てようというのです。災い転じて福となすで、二十世紀新時代のお祭になると思っています。

伊達：中心街の活性化につながりますか。
仁木：今年の初詣は、仮社殿なのですがいつもの年よりも多くの参拝客がありましたし、上棟式も多くの市民が参加しました。商店街も一体となってこれらのイベントを推進しています。

市民の期待がよく見えます。来年は新発田城の二つの櫓復元もできあがるので、連携した行事にしたいですね。

城郭空間の再生：新発田城の櫓を復元する

新発田の中心街では、諏訪神社のほかにも二つ、本格伝統木造建築の再建工事が進行中である。新発田は十六世紀初頭から城下町として都市

経営がはじまった。

街の中心には藩主溝口氏の城郭があったのだが、明治初の廃城令で、城郭内の建築物は撤去された。わずかに本丸表門と隅櫓(いずれも国指定重要文化財)、石垣、濠が残るのみである。

「本丸」と「古丸」という城郭内中心部は、大部分が陸上自衛隊駐屯地であり、一般には一部にしか入ることはできないが、駐屯地内も含めて都市公園指定となっている。

「お諏訪さま」も「新発田城」も新発田のシンボルであり、公園整備と城郭建築の復元は、新発田市民の長年の念願だった。自衛隊用地内であることや資金面などで復原構想は何回も浮上しては消えた。

そこで2000年から市民団体を糾合して市民運動として動きはじめ、三万余名の署名を集めて2001年12月に市長に提出した。今は「新発田城復元の会」(藤田加津栄会長)として、城郭の研究や広報活動を行っている。

そのよつな動きを経て、「地域文化財・歴史的遺産活用による地域おこし事業」(起債事業)の予算がついて、2000-01年度調査で、ようやく復原が具体化した。

復原建物は、掘端のよく見える位置にある「辰巳櫓」と「三階櫓」である。特に三階櫓は、天守のなかつた新発田城でその役割をもち、再建が最も望まれていた。

自衛隊用地との調整が行われて公園供用地も広がり、2002年7月に二棟の本格的木造建築(総額約十二億円)に着工した。

2003年4月には、市民千五百人が参加して古式にのつとつた上棟式イベントが行われた。2004年春竣工を目指しているから、諏訪神社の完成とほぼ同時期であり、三棟の伝統様式木造建築が競っている。

こちらの建設資金は税金だが起債事業によるので、いずれ返済する借金で市民負担となる。し

かし市民は、後世のための文化投資に誇りを持っているのである。

新発田城は、街なか観光拠点として年間約三万人を集め、その近くの「蕨台虹沼記念館」は約二万人を集めている。

さて、これらが相乗効果を持って、文化観光による新発田中心街再生になるかどうか、今、それが問われている。

歴史街並み再生：寺町・清水谷地区まちづくり

新発田中心街には、寺町の緑豊かな寺院群、壮麗な諏訪神社、銘酒の造り酒屋、清水園(元藩主下屋敷)、城下町固有の銘菓店や伝統的街並みなど、新発田城のほかに見えるべきものは多い。しかし、特定のものが宣伝されないし、ネットワークされてもいないのが現状である。

中心街ネットワークの大きな骨格のひとつが、北の新発田城郭地区と南の清水園地区を結ぶ寺



左手前: 蔭谷虹児記念館 右先方: 県立新発田病院

の鉄道利用者にも便利だ。空洞化著しい駅前中心街の活性化にもなる。そこに移転してはどうかという声が高まってきた。

正式な発表はないままながらも移転は確実にわかってきて、市も行政としての対応をいろいろと行っただが、移転先は2000年末になっても不明だった。

その間に最も心配して動いたのは、中心街の商業者たちである。

県立病院は大集客施設であり、その移転は駅前大型店の撤退以来進む商店街の更なる衰退になる。それよりも、安心して暮らす拠点が街になくなくては、ますます住みにくい街になり空洞化が進むと懸念は深まる。

中心街空洞化問題と病院移転

じつはこのころ、新発田の中心商店街では二つの大きな問題に直面していた。



新発田駅前商店街は今、空洞化状態

駅前広場の整備計画であり、これを中心街再生の手立てにしたいが、駅前商店街など関係地権者にとっては先行き不安も大きい。

もうひとつは、市街地を南に拡大するように市街化調整区域の田園地帯にニュータウン開発計画が動きつつあり、大ショッピングセンターができるというのである。

ところが1998年3月に、地元商業者が共同して商業集積法による郊外ショッピングセンターを開設したばかりだし、中心街では二割くらいがシャッター店のありさまである北バイパス道路沿いには、安売り店舗が軒を並べて競っている。そこに新規大規模店舗進出では、郊外共同店も中心街も大変である。

1999年10月、新発田市商店街連合会は顧客に呼びかけて、駅前の工場跡地に建つ産業遺産建物「あやめ蔵」でまちづくり研究ワークショップを開いた。約80人の市民が、中心市街地をどうするかテーマを囲んで夜遅くまで語り合った。特に、県立病院は高齢社会でも便利な街なかほしい、移転するならば駅前工場跡地に中心街の話題となった。



駅前にある旧大倉製糸工場跡地

これは、商業者たちが商売の側からでなく生活者の側から、まちづくり提案をする画期的なイベントだった。

新発田商工会議所は1999年、当時京都大学教授の中村良夫氏らに指導を受けて「新発田新世紀年ウイジョン・新世紀城下町づくり」構想を策定し、2000年1月に新発田市長に提案し市民に公表した。これには、人口減少と高齢社会に直面する地方都市を、暮らしと仕事の場として再構築する視点で具体的な提案をしている。

ついで4月に、緊急かつ優先的に実行すべき重要事項として、県立病院の駅前移転と郊外開発計画の見直しを、市長に提案した。

2000年12月には県から病院改築について移転先を明示せずに正式発表されたが、あいかわらず、郊外が有力との噂もある。駅前商店街では、病院の駅前誘致運動を顧客である市民を巻き込んでイベントを行った。2001年2月、商工会議所は駅前移転の請願を市議会にだして採択となり、政治的な方向が見えてきた。

駅前地区再開発と病院計画



駅前にある元米倉の産業遺産「あやめ蔵」

県と市の間でいろいろ水面下の動きもあった。よつだが、2001年8月、県は病院移転の住民説明会を初めて開催。移転先は駅前が最有力と発表し、ここによつやく事実上の決定を見たのであった。

県立病院用地は工場跡地だけでは足らず、周辺も取りこむ必要がある。それまでの道路広場整備が中心の駅前整備計画は大きな転機を迎えることになった。

2001年から、工場跡地周辺から駅前、商店街なども含んで、病院と街とが一体となる土地区画整理事業による再開発計画として練りなおし、市と地権者たちの話し合いが進められた。2003年には事業認可まで持ち込まれて、これから換地計画に入り、病院は2007年4月開院予定。区画整理事業は2008年度末まで予定である。

さて、まずは県立病院の駅前地区誘致には成功したが、次の大課題は、この区画整理事業を県立病院を核とする中心街再生まちづくりとすることができるといつかである。

住民市民側にも動きが出てきている。地権者たちは、駅前地区活性化推進協議会(小山忠智之



あやめ蔵で開いたまちづくりワークショップ風景

助会長)を結成し、これまで駅前まちづくりに取り組んできたが、2003年11月にこの会を改組、「NPO新発田まちづくりステーション」設立を認証申請中である。

土地だけを動かす土地区画整理事業に対してこのNPOは建物について「プロユースしたり、できあがる街を運営したりする組織として活動しようとしている。駅前地区に限らず、中心街再生についての活動も意図しているという。

少子高齢化時代において、自分の住み働く街に県立病院のような総合病院があることは、安心して老後を暮らせる街、安心して子育てができる街として、中心街再生の核となるはずである。商店街も病院の集客力を生かして、活力を取り戻すことができるはずである。

そのような「安心生活まちづくり」を実現できるかどうか、五年後を期待しているところである。

新発田中心市街地再生の課題

筆者は新発田まちづくりに6年前から係っているが、中心市街地は歴史文化が豊かで大好きな街だ。

だが、そのフリンジ部は、アングが美味い饅頭の皮のカビのごとく、沿道安売り店舗群で、城下町に入る道とは思えない無残な風景だ。

都市計画の市街化区域指定は比較的コンパクトなのだが、商業系用途を外周りのバイパス道路沿いにも指定するからだ。その面積を合わせると中心部より広い。

中心市街地は、活性化基本計画もあるが、人口減少も商業衰退傾向も著しい。ここに報告した中心市街地再生プロジェクトに期待



するところ大である。課題は、それらプロジェクト相互の連携で、相乗効果を生み出す仕掛けづくりである。特に病院と駅前再開発の連携は最も期待されるし、難しくもある。区画整理事業が街路と公園整備に偏しているの、県立病院を起爆剤とする商店街や市街地住まごをいかに整備するか。さらに重要な課題は、病院跡地の再利用計画である。新発田城の正面に位置する中枢的場所をどのように中心市街地再生に資するか問われる。跡地計画が跡地だけではなく、新発田城から官庁街そして歴史軸にかけての総合的まちづくりの一环になるべきだ。

その視点から言えば、もうひとつの跡地、産業会館跡に「地域交流センター」計画があるが、時期的問題はあるにしても本来ならばこれも共に考えるものだろう。

中心市街地再生は商業政策に目が行きやすいが、本来なら住宅政策であるべきだ。中心市街地に居住者が多くいれば商業は自然に活性化される。病院も役所もあるから便利だ。

ところが一方で、中心市街地住民を外に誘導するフリンジ部開発をしている。現に西新発田で「リリオタウン」の名で宅地分譲中の土地区画整理事業は、市街化調整区域開発で、かつて中心商店街から撤退した大型店舗も進出する。人も店も市内で移動するだけで、総量が増えな

いばかりか、これから減る方向の時代だ。よほどの確に土地利用をしないと、隙間だらけの街になるおそれがある。



中心商店街はかつて賑しかったが今は空き家が目立つ



国道バイパス沿いは安売り店群で見えるも無残な風景

中心部の歴史的街並みを守り復原創造するには、景観コントロール策が必要だ。フリンジ地区の醜い風景も何とかしてほしい。

新発田市の基本構想は、「食料供給都市」を標榜する。今の時代だからこそ美にすばらしい政策だ。田園を豊かな生産の場であり美しい風景として守り育てる意義を持っている。中心市街地の再生は、外周部の田園地帯の育成と好一対になっていることを忘れてはならない。(2003・12・22)

注：小論は、「季刊まちづくり」第2号(2004年3月発行 学芸出版社)に掲載した。